

## 謎のプランクトン

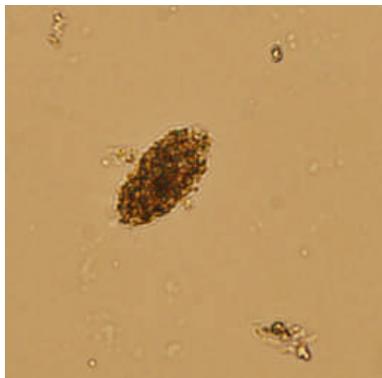
今から20年前、岡山県水産試験場(現、岡山県農林水産総合センター水産研究所)に入ったばかりの私は、顕微鏡の前で悪戦苦闘していた。当時も問題となる赤潮プランクトンに違いはなかったが、カラー写真や動画は無く、白黒写真と解説、遊泳形態に関する上司の説明だけがたよりであった。シャットネラの仲間は、「グミのような生物で一部を除きゆっくり泳ぐ。」ヘテロシグマ アカシオは、「麦飯をつぶした不定形で普通の速さで泳ぐ。」ギムノディニウム ナガサキエンセ(現カレニア ミキモトイ)は、「柔らかい10円玉の縦横を中心に紐で結んだ感じの形態をしており、回転しながら優雅に泳ぐ。」といったところだ。

これら赤潮プランクトンを見つけ出すことは困難を極め、特にシャットネラの仲間は、遊泳するシャットネラ アンティーカ、シャットネラ マリーナだけでなく、ほとんど遊泳しないワラジ型、イガグリ型(今は、前者はシャットネラ オバータ、後者はシャットネラ ベルキュローサと

名付けられている)と言われる種類がいて判断が難しかった。

ある時、ワラジ型と判断した種類について上司に確認を求めると、「これは、動物プランクトンか何かのフンだろう。」との衝撃的な答えが返ってきた。以来、半信半疑だったが、最近、児島湾内の動物プランクトンを顕微鏡で観察するため、図鑑を調べていたら、そのものズバリの写真が「日本の海産プランクトン図鑑」(共立出版)のコラム「カイアシ類の糞」に掲載されていた。地球上で最もバイオマスが多いとされるカイアシ類というプランクトンのフンと記載されている。大海のカイアシ類のフンはマリンスノーとして深海生物の生態系を支えていることを知ってはいたものの、私が先人のように後輩に伝えるにはまだまだ勉強が必要である。

(資源増殖室：岩本)



マリンスノー (カイアシ類のフン)